

「祈りの家で」－マタイによる福音書講解説教 85－

イザヤ書 第56章 7節  
マタイによる福音書 第21章 12節～17節

説教 岡村 恒 牧師

ここは〈祈りの家〉だ。主イエスの言葉は叫ぶように神殿に響きました。主イエスはどうしても我慢なりませんでした。神殿があるべき姿でなくなっている。ここで生きる人々が本当の力と喜びを受け取ることができずにいる。

エルサレムの神殿に入って最初の場所は異邦人の庭と呼ばれる広場です。ここにはユダヤ人ではない人もユダヤ教に改宗し、聖書の神を信じる人は誰でも入ることが許されました。人々はそこで、神に祈りを捧げ、罪の赦しを求め、神様に近づいて行くために、鳩や山羊、羊といったものを買って求めたのです。特別な神殿のお金に両替をして買いました。神様を賛美し、祈るための、準備の場所でした。

しかし、主イエスがそこに来たとき、人々の関心は神様には向いていませんでした。主イエスはこの日、神殿をそのままにしておけませんでした。なぜなら、主イエスがこの時エルサレムに来られたのは、私たちの身代わりの犠牲となる目的があったからです。それは私たちと神様との間の遠く離れた関係を結びあわせるためのものでした。

主イエスは両替人や物を売る者の台を倒しました。荒々しい主イエスです。なぜそんなことをするのかと問う人々にお答えになりました。「『わたしの家は、祈の家となえらるべきである』と書いてある。」（マタイによる福音書 第21章13節）この神殿が祈り以外のために使われてはならない。主イエスは、まるで自分自身が汚されているかのように痛みを覚えられたのだと思います。主イエスは罪の支配を私たちの世界から追い出すために来られました。

来年の10月31日、宗教改革500周年記念日として世界中の教会で祝われます。プロテスタント教会だけではなく、カトリック教会も一緒に記念する年になります。私たちが神に赦され、救われ、神の子とされるのはなぜか。そのことがもう一度再発見された出来事です。当時のキリスト教会は思い違いをしていました。神様に近づく方法が人間の側からあるような誤解がありました。

500年前、1人の人が聖書を読んで立ち止まりました。神は哀れみをもって、ただ主イエスに信仰を持った者に罪の赦しを与える。聖書に

そう書いてあるのではないのでしょうかと公に問いかけました。教会を分裂させようとか新しい教会を立てようなどとは微塵も思いませんでした。500年前から、教会はこの福音をもう1度確認をして握り締めました。大阪教会もこの同じ信仰を受け継いでいる教会の1つです。

この日この神殿で、体に不調のある人、目の見えない人、足の不自由な人が、主イエスのもとで癒されました。人々が驚く奇跡が立て続けに行われました。主イエスが何のために地上に来てくださったかをお見せくださる意味でした。当時、病気や障害は本人なり家族なり、あるいは遠い先祖に神の怒りをかうことがあって、その結果が現れている。あるいは悪霊がこの人を捉えていると人々は考えました。病気になった人は、病気の苦しみ以上の痛みを覚えました。主イエスはそういう人々を解放し、回復し、神の力が人を生かすことをお見せになりました。

ここは〈祈りの家〉だ。主イエスがこう言われたとき、そこでご覧になっていたのはエルサレムの神殿ではありませんでした。今ここにいる私たちです。聖霊が宿る神殿としてあなたを生かしている。あなたがいる場所が〈祈りの家〉です。何が起こっても、神が共にいてくださることを、繰り返し確認しながら、祈りの生活をすればよい。主イエスはそう言われます。魂の奥底で神の息吹を受け取るような仕方、私たちは生きることができます。祈ることを許された者として地上を歩むとき、その生活全体が悔い改めの歩みとなり、感謝の歩み、神の栄光を指し示す歩みとなります。

世界中の教会で、特にプロテスタント教会で宗教改革が思い起こされています。改めて、ただ神の恵みにより私たちは赦され、新しく生きることができるのです。そして神が与えてくださる新しい命は永遠に失われることのない命です。私の家は〈祈りの家〉、そう宣言をしてくださった主イエスが、私たちを赦しと命の中に招き入れてくださいます。これからの歩みの中で繰り返し、自分が〈祈りの家〉、祈る者として生かされていくことを思い起こして歩んでください。聖霊なる神は、皆さん1人1人に語りかけて、祈りの生活を助け導いてくださいます。

（記 説教要約奉仕者）